順正寺報

遊煩悩林

ぼんのうのはやしにアソブ

盂蘭盆の法要

左記の通り法要をお勤めいたします。どうぞ皆様お誘い合わせのうえご参詣ください

七月十六日（月）

午後六時より（注、足元明るい内の方が安全なので本年より一時間早めます）

総供養読経　お説教

お盆の期間

七月十三日より十五日

八月十三日より十五日

基本的に右記の期間ですが七月、八月中はご都合に合わせて随時お盆の読経に伺います。ご希望のお宅は早めにご連絡ください。

尚、住職、副住職共に外出している事が多くなりますので、お寺にお参りにいらっしゃる場合も必ずご連絡ください。

お盆です。一般的にお盆には亡くなった人がお浄土から還ってくると言われてます。その為お迎えの火を焚いてそしてお帰りになる時お見送りの火を焚く訳ですが私たち浄土真宗では本来迎え火も送り火も焚きません。これは念仏を唱えた者は誰でも時処諸縁を選ばず亡くなるとお浄土に迎えとりき直ちに仏として頂け、仏と成るとすぐにこの娑婆世界に還り私たちを同じ浄土に導いて下さるからです。つまり仏さまに成られて遠くのお浄土で見守っていて下さるのではなく、すでにこの世界に還り来たり常に一緒に歩んで下さっているからです。日々之仏事です。そう言う事で言えば「じゃあお盆はいらんのか?」となりますが実際毎月ご命日にお経を頂く月忌参りが有るところではお彼岸お盆共に敢えてしない所もあります。ただ首都圏ではそういう風習は余りなく日々之仏事と言われても忙しさにかまけて中々出来ません。そこで他宗と同じように期間を決めてお参りをし、お経を頂きます。(お経〈お教〉は仏さまに差し上げるものではなく私たちが仏さまから頂くものです)ですから他宗で行うさまざまな事、先の迎え火、送り火やお仏壇の前にお盆棚を作って沢山お供えしたりと特別な事は必要ありません。いつもどおりです。中には浄土真宗は簡単でいいなんておっしゃる方もいらっしゃいますが誤解のないように申しますと「簡単」とか「やらない」とかではなく日々仏事なのであえて特別にする必要が無いのです。また人のこころは危ういもので何かをすることで誰かの為とか何かの為にしてあげてると成り、それを私が頂くという謙虚さは無くなります。気を付けましょう。お盆の短い期間ですが亡き人に思いをはせ仏さまの教えを共に頂いてまいりましょう。

住職

高校時代の友人が「遠野物語100周年文学賞」を受賞しそれが出版された。デヴュー作は一七年前でライトノベルだったが今回は生きたいという人間の本質的な欲に焦点を当てたちょっとおどろおどろしくそして切なく哀しい物語である。一作目を上梓してからえらく時間がたったが現役のサラリーマン一番忙しい年頃だったのね。しかし彼がこんな大それた事をするなんて思ってもみなかった。で友人は友人でまさかカンセイ(私の名)のお経聞いて説教までされるなんて世も末だと思っているでしょう(ひょんなご縁で奥さんのお母さんの御遺骨をお預かりしています)。先日当時一緒に遊んだ友人たちと受賞を記念して会った。それぞれが忙しく五年とか十年振りの再会である。みんな見た目はオヤジになったけど話し始めるとあの馬鹿な高校生のままだった。

『人魚呪』 神護かずみ著 角川書店から出版されています是非ご一読下さい。

住職

【無趣味なわたくしに趣味ができるかも・・・な話。】

街を歩いていて、人と出会って、美味しいものを食べに行って、写真に収めておきたいなと思うことがよくある。だから、割といつもカメラを持ち歩いている。

携帯電話にもカメラの機能が付いていて、それで撮ればいいのでしょうが、なかなか携帯電話のカメラ機能で写真を撮るのは難しい。だから、コンパクトカメラという小さなカメラを持って歩いていることが多い。

でも、いつも手に持っているわけでもなく、鞄の中に入れているので、いざ、この場面を！という時にカメラが手にないと、タイミングを逃してしまったり、いちいちカメラを出すのが面倒で「いいやぁ」となってしまう。それに、なんだかコンパクトカメラを手の中に収めて歩いていたら（身体がデカイので手も大きい。よって、小さなカメラだと手の中に収まってしまう）「盗撮魔と間違われるのでは・・・。」などと考えてしまう。首からかけている他人を見掛けるが、肩こり症の私としては避けたい行為だったりする。

いつも手に持ったりして、いつでもシャッターを押せる状態であれば、写真を撮るという意識を何処かに持ちながら歩いているのだろう。そうすれば、自ずと自分が何に興味があり、何を撮りたいのか。どういうアングルで、何を表現したいのか湧き出てくるのだろう。旅行やちょっと出かけた際はカメラを常に手にしているので、自然と色々なところに目が行く。盗撮魔に見られないように気を張って、ちゃんとカメラを手に持って歩くようにしようかなぁ（きっと、誰もそんな風には思っていないのでしょうが、気の弱さがこういうところに出る）。

そんな矢先、先日、ちょっとした出来事があり、愛用のコンパクトデジタルカメラを破損してしまった。全く使えなくなったわけではないので未だに大切に持ち歩いているが、ちょうど、ある理由で新しいカメラの購入を考えていたこともあり、思い切って一眼レフのデジタルカメラを買った。使い方がいまいちわからないし、それこそ、アングルや、何を撮りたいのかがきちっとしていないと、一眼レフカメラというやつはコンパクトカメラよりもひどい写真しか撮れない、ということだけ解った。少し持ち歩いて、目を養ってみようかなと思っている。

われわれは日々の生活で、いろいろな出来事や、流れ行く時を見逃していると思う。他愛もないと思われる日常の中に、とても大切なことがあったり、気付かされていることがあったり、わたしをわたしたらしめる出来事、支えてくれている他人とのふれあいがある。そんなことに一回でも多く気づき、感謝できたらいいなと思う。

カメラを持ち歩いて養われる目のように、仏法というカメラを持って養われる目を持って歩みたい。

それはそれとして、どなたか写真の撮り方教えてくださる方いませんかぁ。ごくごく優しく。

副住職

日蒙友好への挺身　　酒井　敏充

平成１７年、モンゴル国立大学が日本について世論調査を行いました。これによりますと、諸外国の中で「好きな国」・「行きたい国」・「親しくすべき国」として日本とアメリカを挙げた者が多く、日本を「国として親しみを感じる」とした回答は７０％を超えました。日本に対するイメージについては、「経済力・技術力の高い国」が最も多く、ついで「豊な伝統と文化を持つ国」、さらに「自然の美しい国」と続きました。日本人の特徴としては、礼儀正しく勤勉であると好意的でした。今後の両国関係については、政治、経済、文化のすべての面で従来以上に緊密にしたいとの意向が示されました。今後の日本の役割については、「科学･技術の振興」・「途上国への経済援助」・「地球規模の課題」・「アジアの連携強化」などに国際的に貢献することを期待されました。この様に、モンゴル共和国はアジアでも有数の親日国家であることは間違いありません。

日蒙親善の歴史は古く、明治３６年カラチン王府による女学校創設に伴う日本人女性教師の派遣要請に端を発します。当時、清朝統治下の蒙古には諸王の小王国が乱立し、“旗(ｷ)”と呼ばれていました。中でもカラチン旗は非常に高い格式の内蒙古の王家で、清の肅(ｼｭｸ)親王の妹が王妃であることからもうかがえます。この要請を受け、白羽の矢を立てられましたのが、上海務本(ｳｰﾍﾞﾝ)女学堂で教鞭をとっていました「川原操子(ﾐｻｺ)」です。操子は明治３３年中国人子女教育に当たる史上初の日本人女教師として単身中国に渡り、徳育教育で実績を挙げつつありました。彼女は聡明で誠実であるうえに、相手をたちまち魅きつける豊かな親和力を持つ人柄で、中国人の絶大な信用を勝ち得ていました。操子の父・河原忠は、信州松本の藩士で、祖父の代から儒学の家柄でした。父・忠は「国家百年の計は教育にあり」と断ずるほどの教育尊重論者であり、「日本と中国との友好がアジアに平和をもたらす」と信じるアジア主義者でもありました。また、彼は、シベリア横断（シベリアの実地調査のため、一万八千キロを単騎で横断）の壮挙で有名になった軍人福島安正(ﾔｽﾏｻ)少佐とは竹馬の友であり、同じ松本藩士である川島浪速(ﾅﾆﾜ)とも親交がありました。このような父の薫陶(ｸﾝﾄｳ)を受けて育った操子にとって、外地で子女教育に携わることは、父の志を継ぐことでもありました。

当時、覇権をアジアに及ぼしつつあったロシアとこれを国防上阻止したいとする日本とは一触即発の状態にありました。特に蒙古は昔からロシアの勢力の強いところで、日本は対蒙工作に苦慮していました。このような状況下での操子の蒙古派遣にはもう一つ別の重要な使命があったのです。清の肅親王の顧問格である川島浪速が操子に求めたのは秘密情報活動でした。つまり表面上はカラチン王家の教育担当ですが、同時に日蒙関係をつなぐ外交官であり、命を賭けた軍事秘密情報員でした。「万死に一生を期する冒険」と後年書き記したように、当時は無事の生還が危ぶまれるような情勢下にありました。「千危万難(ｾﾝｷﾊﾞﾝﾅﾝ)は覚悟の前であろうが、万一の際はこの懐剣をもって処決し、日本女子の名を汚すな」と父から懐剣を贈られた程でした。このような時代背景の中で操子は表裏二つの大きな使命を無事見事に果たしたのです。「*元来私は内気で、仰々しいことはむしろ嫌いであります。そういう気質の私があの時代によくもまあ蒙古に入り、あのような大胆な事を行えたものだと、自分でも不思議に思う位でございます。つまり運命の手に導かれて、知らず識らず蒙古に行き、柄にも無く国家的な重要なお仕事を勤めさせて頂くようになったと申すのが適当でしょう*」と後年語っています。若い女性が単身で北方の異国に乗り込み、女

子教育に身命を捧げたのは、明治という時代の空気であったからでしょう。戦雲立ち込める最前線で、国のためなら何でもするというのは、当時の日本人としてはむしろ、当為（トウイ…当然の行為）として考えられていたのです。

明治３３年（１９００年）義和団の乱が勃発しました。この年は南方の広東省では孫文が辛亥革命の狼煙(ノロシ)を挙げ、またロシアが満州を侵攻・占領するといった世界を驚愕させる大事件が次から次へと起きた天下争乱の年でした。義和団とは白蓮教(ﾋﾞｬｸﾚﾝｷｮｳ)という中国特有の宗教的秘密結社の一つで「扶清滅洋(ﾌｼﾝﾒﾂﾖｳ)」をスローガンに掲げ、外国人排斥運動を展開し始めました。これに対抗するため、日、米、英、露、独など８ヶ国が連合して出兵し、これを鎮圧した事件です。この事件はチャールトン・ヘストン主演の「北京の５５日」という題名で映画化されたので知る人も多いのですが、この事件で大活躍をした三人の日本人がいます。ひとりは日本軍を率いた司令官・福島安正であり、もうひとりは連合軍の義勇軍隊長を務め、奮戦した柴五郎中佐であり、最後のひとりは弁舌をもって連合軍、義和団の双方を説得し、東洋の至宝・紫禁城(ｼｷﾝｼﾞｮｳ)を戦火から守った通訳官・川島浪速です。

河原操子が単身蒙古に赴任したのは日露戦争の前年の明治３６年でした。東も西もわからない砂漠の果てへの赴任は「王昭君」の故事を想起させ、さぞ心細かったに違いありません。カラチンでは王と王妃の出迎えを受けるなど破格の待遇をもって遇されました。操子は蒙古民族再興のための教育にかける王室の並々ならぬ情熱を観取し、新ためて使命感に燃えることとなりました。また、蒙古の人々と接するなかで蒙古人が日本人と同じように信義を重んじ、規律正しいことを知り勇気づけられました。操子は基礎科目に加え、歴史と地理を教科（モンゴルでは史上初めてのことである）に加え、修身を中心とする寺子屋風の道徳教育を行いました。開堂式の際には、生徒は２４名しか集まりませんでしたが、評判が浸透した一ヶ月後には６０名に増えていました。無知からくる偏見と思い込みが、閉鎖的な環境を作り出していることを知り、教育によりその蒙を開く努力をしました。それは何時も生徒と一緒になり、熱意をもって辛抱強く教えることでした。この努力が功を奏し、たちまちの内に信望を集め、生徒の間では「先生のために勉強するのだ」という雰囲気が生まれました。ついには王妃自らも生徒に混じって学ぶことになり、日本という国への理解が生じ、日本に憧れを抱く生徒も多くなりました。お互いの理解を深め、女子教育の普及を図るために催された園遊会は大盛況になり、出席者が７００名を超えたほどでした。

一方、川島から与えられた秘密活動も親露派(ｼﾝﾛﾊ)の多い王宮内で極秘裏(ｺﾞｸﾋﾘ)に進められました。敵陣深く潜入し、シベリア鉄道を爆破する特別任務を帯びた横川省三、沖貞夫らの決死隊を王の許可を得て迎い入れ、秘かに送り出す任務も無事にこなしました。決死隊は東清鉄道の爆破に失敗しロシア軍に捕えられ処刑されましたが、日本軍人として潔い覚悟を示したことで戦史に名を残しました。明治３９年操子は２年に及ぶ蒙古での任務を終え、３名の教え子の留学生を帯同し帰国しました。留学３少女は７年間の勉学の後、蒙古に帰り、それぞれ３つの学堂の教師となり、子供たちに日本文化を紹介するなど日蒙両民族の親善のために生涯を捧げたと伝えられています。

余談になりますが、明治のこの時期に中国大陸における無限の可能性と夢を求めて渡航した一人の青年がいました。「初恋の味」カルピスの創業者・三島海雲です。大学在学中に

日本語教師として北京に行きましたが、間もなく貿易商社「日華洋行」を興しました。折からの日露戦争で軍馬調達のため、蒙古に行き来することになりました。そのうち遊牧民の飲むすっぱい飲み物が胃腸を整えるのに効果絶大であることを知ったのです。これがいわゆる「酸乳」であり、後年、工夫をこらして商品化したのが乳酸菌飲料カルピスなのです。彼もまた時代の空気を吸って生きた人物でありました。

「勉強忍耐は才力知徳の種子なり」日露戦争時の陸軍大将・乃木希典(ノギマレスケ)の言葉です。耐えて忍んで勉強することが才能、知識、道徳を伸ばす基になるのです。操子は蒙古の風俗、習慣、考え方などを吸収しつつ、それを生かして工夫を凝らして忍耐強く蒙古に学を広めました。河原操子にとっては清国や蒙古での教育の振興もロシアとの戦争もあくまで東亜の平和実現を目的とした同一線上のものであり、またそれは日支提携を志す日本人に共通した想いだったと言えます。そしてその目的のためには命も惜しまないというのが、当時の一つの「時代の雰囲気」だったと思われます。己の目指すところが、国家の理想と合致しており、「人が時代を作るのと同時に、時代も人を作る」という見事な好例と云えましょう。

—了—

○お寺にお参りなさった方は、お気づきと思いますが、本堂に「大馬鹿者」と書かれた掛け軸を掛けています。私の父が書いてくれたものです。素敵な伯父さんで、字体を自ら開発し、京都の祇園界隈には、伯父さんが書いた看板がいくつかあるらしい。この歳になると、「大ばな者!」と言われる事もあまり無く、この字を見ると、なんだか素直に頭が下がります。法要の時だけ掛けようと思ってましたが、常時掛けてます。

定例

聞法会　毎月2日午後7時より（8月はお休みです）

白色白光の会（婦人会）毎月第2木曜　午後1時より

微妙音（感話の会）毎月第2土曜　午後3時より

照久山順正寺（じゅんしょうじ）　住職　江口貫正

練馬区石神井町3の17の4

でんわ　03-3996-2064